

中堅の現職教員を対象にした「スクール・マネジ
メントの実践的な課題」を中心とする研修プログ
ラムの開発報告書



島根大学教育学部

Contents

I 調査の実施団体・実施者名.....	1
II 調査の内容.....	1
III 調査の結果等.....	3

参考資料

1. 実施要項・プログラム（日程表）.....	11
2. 研修レポート（フォーマット）.....	22
3. コース別課題レポート.....	25
4. 講義資料（抜粋）.....	30

I 調査の実施団体・実施者名

団体名	氏名	職名	実施体制・分担
島根大学教育学部	伊藤豊彦	教育学部長・教授	調査責任者
	権藤誠剛	教育学部教授	調査の連絡調整
	金子泰久	教育学部准教授	調査の連絡調整
	塩津英樹	教育学部講師	調査の連絡調整

(協力する教育委員会の担当者)

氏名	教育委員会名・職名	教育委員会所在地・電話番号・FAX
領家芳明	島根県教育委員会義務教育課企画人事グループ グループリーダー (指導主事)	島根県松江市殿町 1 Tel : 0852-22-5422 Fax : 0852-22-6026

II 調査の内容

1. 調査テーマ

中堅の現職教員を対象にした「スクール・マネジメントの実践的な課題」を中心とする研修プログラムの開発

該当する調査対象の学校種

小学校	調査対象となる教員数 :	6人
中学校	調査対象となる教員数 :	6人
高等学校 (特別支援を含む)	調査対象となる教員数 :	4人
その他 (具体的に : 指導主事)	調査対象となる教員数 :	3人

2. 調査の具体的方法等

(1) 調査の具体的内容

多様かつ複雑に変化する現代社会にあつて、教職の専門性の内実を構成する「教育的知見」もまた絶えずリニューアルすることが求められている。特に学校教育の指導的人材となることが期待されている現職教員にとって、最新の理論に基づく新たな教育課題の発見と課題解決に資する教育的実践力の高度化は必須の研修課題である。

このような観点から、島根大学教育学部と島根県教育委員会では、共同して比較的長期にわ

たる現職教員の大学への派遣及び受け入れ体制を構築し、「大学と行政が協同して取り組む現職教員プログラム」を計画し実施した。

○具体的な調査内容

島根大学教育学部は、島根県教育委員会との間において、協定を結び、様々な事業を行ってきたところである。

今回のプログラムは「島根大学教育学部現職教員研修」ということで銘打ち、内容については、概ね次のような役割で行った。

・プログラムの開発・作成

基本的な構成については、大学と教育委員会で、スケジュール、基本的な方向性について、協議し、合意した。

具体的なプログラム内容については、主に大学で作成するが、適宜、教育委員会の助言を受けた。

・受講者の選定・派遣等

受講者については、大学で募集することではなく、教育委員会において、選定し、派遣された。

受講対象者は、主に主幹教諭クラスとした。

(2) 調査方法等

今回の申請に係るプログラムの直前に、当該プログラムのベーシックコースとして、2週間の研修を行っており、今回の申請に係るプログラムは、ベーシックコースを受講した教員を対象として行った。

ベーシックコースは、スクール・マネジメントを中心にしたプログラムで構成されており、今回の申請に係るプログラムは、そのベーシックコースを受講し、そこで課題として認識したことを持って学校現場に戻り、課題の解決への実践を行った後、参加することとした。

(プログラムの期間はベーシックコースと同じ2週間で実施)。

また、今回のプログラムは、アドバンスコースとして、次の3つのコースに分かれることとした。

・マネジメント上級コース

・特別支援教育コース

・教科指導「理科」コース

プログラムの内容は、完全なセパレーション型ではなく、共通的な課題については、3コース共通のプログラムとして実施した。

受講生には、受講に対する評価を提出するとともに、今後、当該プログラムに関しての改善等についても、報告を提出させ、それを来年度の実施に反映させていく。プログラム改善に当たっては、教育委員会と協議しその結果を反映することとする。

また、受講生のその後の研修受講後の意識変化も追跡することも検討する(本年5月～6月に調査予定)。

なお、教科指導「理科」については、教科を「理科」に限定するのではなく、次年度は他の教科に入れ替えを行い、今後、多くの教科についてのプログラムを行っていくこととした。

Ⅲ 調査の結果等

1. 具体的なプログラム

今回の研修会のプログラムは別紙のとおりである。

3コース共通に受講する講義と、それぞれのコースのオリジナル講義とで構成し、オリジナル講義は当該コースの受講生は必ず受けることとし、その他のコースの者は、自己研修時間で、受講が可能な場合は、受講を認めることとした。

2. 講師の選定

研修内容を踏まえ、当該講義を行うにあたり、適当な人物を本学が選定した。中央研修での講師、本学の教員、島根の教員等、地域の現状を踏まえつつ、最新の内容を話せる講師とした。講師の決定についても県教委と相談の上、行った。

3. 受講生への課題

受講生に対して次の課題等を与えた。

・研修レポートの作成

受講生は、研修期間中、受講した講義について内容や感想などをまとめ、週末に教師 教育研究センター（以下「センター」）に提出するようにした。

なお、受講生に事前に配布したファイルに綴じる等、受講後の資料（振り返りができるよう）になるようにした。

・自己研修課題の設定

今回の研修を受けるにあたり、自己の研修課題を設定し、そのレポートを2月末までに提出するようにした。

・コース別の研修課題の設定

コースごとに研修課題を設定し、コース内で検討し、最終日に提出するようにした。

4. 評価

受講生からの評価について、次のとおり、研修レポートに記載された内容を掲載した。

特定のアンケート項目は設けず、自由に記入させた（以下5も同様）。

(1) 講義に対するもの

- ・今回この現職教員研修を受講しながら、以前受講した中央研修の雰囲気を感じたり思い出したりした。多彩な講師先生、講義・演習内容の質の高さは、中央研修と同等あるいは島根県教育に根ざしているという点で考えると中央研修を超えると思えるぐらいの充実した研修であった。
- ・ある講師先生が、「内容が皆さんに入ろうと入るまいと、とにかく詰め込みます。」とおっしゃった。20日間研修した中身が全て頭に入ったかと言えば、正直かなりの消化不良を起していると感じている。幸い膨大な資料とノート記録という財産が残っているので、折にふれて資料を見返し、学校経営にたずさわる立場でこれからやるべきことを構想していきたい。
- ・講義・演習を通して、さまざまな視点からスクール・マネジメントについて考えることができた。さまざまな知見にふれ、今までやってきたことや今やっていることを見つめ直し、整理し、理論

と実践とを関連付けることができた。そして、これからやるべきことをおぼろげながら構想することもできた。現在教育界が置かれている現状や課題、そして解決に向けた方策や取組について多くの示唆を得ることができた。

- ・前期・後期の講義を通して、教育現場の状況や教育課題、教員の資質向上や児童・生徒をとりまく状況など、多くの教育的課題について触れる機会を得た。
- ・それぞれの講義で、講師の方から示される情報が、講義の内容が増えていくに従って、関係づけされていくことが実感でき、自分の視野を広げることにつながっていく経験ができた。これは、自分にとって大変貴重な体験であった。
- ・学校現場において役に立つ情報や具体的な実践内容がたくさん紹介されたことも、今回の後期の研修で大変参考になった点である。来年度以降、実際に現場で活用したい内容が含まれており、この情報をどのような形で現任校の教職員の皆さんに伝えるべきかを今考えているところである。
- ・講義の担当をされる講師の方の中には、それぞれの立場に立って、意見やアイデアを紹介される方がおられる。中には意見が食い違っているものもあった。それぞれの講義内容については、納得のいく部分と自分なりに考えるべき点が含まれているが、今一度たくさんの講義内容について自分なりに見直しをして、自分としてはどう活用するかを考える必要があると思う。
- ・理科教育コースで研修させていただいた講義には、早速明日からでも活用したいものが多かった。今回の学習指導要領の改訂に伴って大きく変化する教科でもあり、広い視野から小中の理科教育を見つめて、実践に移したいと思う。
- ・前期2週間、後期2週間とほぼ1ヶ月間の研修でした。ここまで研修詰めになったのは初めてでした。通勤が片道1時間はかかるので、通勤に疲れしました。大学や文部科学省の方などからの講義はそうそう聞けないので、大変貴重な体験をさせていただきました。講義のすべてを理解するのはとてもできませんが、現在の教育の課題に専門に取り組んでおられる先生から直接聞いたことは自分の目が開かれた思いです。勤務校に帰ったら、この成果を勤務の中で還元していきたいと思います。
- ・一人一人の職員が如何にやる気をもって子どもの教育にあたるか、目の前の子どもたちの微妙な変化に気付き、子どもたちの気持ちにどれだけ寄り添えるかなど、これまでの学校現場に対する考え方や教育観が揺さぶられた1週間だった。「カリキュラム・マネジメント」「危機管理のためのリスクマネジメント」といったいわゆる学校をマネジメントするという考え方にシフトチェンジする必要性を感じた。とかく、学級や学年などの部分に視点が集中してしまうが、教育目標を踏まえたグランドデザインを作成し、全体を見ながら部分部分について検討するという考え方を全職員ができていくことが、本当の意味での共通理解であると思った。また、経済の立場から学校教育を見つめ直すことができた中許先生の講話も、今までの自分の考えの中にはない発想ばかりで、大変参考になった。
- ・自分は特別支援教育コースだったが、現在の命じられている役割が特別支援教育コーディネーターなので、非常に役に立つ講義や演習が多かった。現場に戻ってすぐに実践できることもあり、年度末で時間がない中であるが少しでも困っている児童、保護者、教職員のために道筋をつけてあげたいと思った。
- ・前期とあわせて4週間の研修であったが、現場にいては触れることのできない講義や演習、実験など学ぶことが非常に多い4週間だった。ここで学んだことを自分自身の教育や職場の先生方（特に若手の教員）に伝えていくことが自分の使命であると感じた。
- ・後期二週間の研修は、教科指導の講義も受けることができたので良かった。教科指導や特別支援教育においても、マネジメントの考え方は重要であり、個々がつながっていくことが、子どもたちに大き

な成果をもたらすことを、あらためて認識した。教員は一人一人の思いが強い個人であり、それを機能的につなげる自信は私にはないが、子どもたちのために、まずは自分が、人や情報等様々なものと積極的につながっていきたいと思った。

- ・ 2週間という期間はとても長かったが、最新の教育課題について様々な講師から貴重は話を聞くことができたことは大変有意義であった。
 - ・ 研修を終えた今は、詰め込むだけ詰め込んだという感じでなかなか消化し切れていないのが本当のところである。来週から現場に戻り、学んだことを自分の学校の状況とよく照らし合わせ、活用できるところはしっかり生かしていきたいと思う。
- ・ 体験を通して学ぶ機会もありとても有意義でした。実際に体験することで、新たな知識や授業で活用できそうな情報を得られたこともよかったが、体験して学ぶことの良さを感じることができた点でもとても意味のある事であった。
- ・ 後期研修は、理科の内容が多くあった。机についてじっと講義を聴いているのは案外疲れるが、理科の内容の中には、実習をすることもいくつかあって、楽しく受けることができた。つくづく、自分は理科の教員なのだと思い知らされた。また、同時に生徒の中にも、1日中、教室で座って先生の話聴くだけでは、つらい思いをしている子もいるのだろうと思えた。自分は今まで、実験・実習をさせることで、生徒は興味・関心を高めるのは当たり前で、実験・観察を通して、「知識・理解」や「科学的な思考」を高めたりしなければ、意味がないと考えていた。それは、今でも間違いではないと思うが、やはり生徒の興味・関心を高め、意欲を持たせることは、「知識・理解」の定着や、「科学的思考」を高めるためにも、やはり重要だと考えた。
- ・ 新しい内容や新しいものの見方にたくさん触れることができたように感じる。自分の中で整理、消化できていないところがたくさんあるが、少しずつ噛み砕いて、自分のものにしていきたい。
- ・ 今週も新たな見地を示していただく講義が多く、大変充実していました。毎日いろいろな内容が次々と示されて、一つ一つを消化する余裕がないという贅沢な悩みを感じました。研修を終えてから、時間をかけて自分のものにしていったり、さらに深く調べてみたいと考えています。
- ・ 毎日時間いっぱい講義で大変でしたが、本当に充実した研修でした。得られて知識や考え方を、周りの先生方に伝えたいという思いが強く、すぐにでも話をしたいという気になっています。学校での研修の場は時間的にも限られていますが、日頃の会話の中から今回の研修の内容を多くの先生方に伝えていければよいと考えています。
- ・ 後期一番参考になったのは、「人生は選択の連続だ」と題して、ジュニアアチーブメント日本の専務理事である中許善弘先生の講義と「特別支援教育からみた学校連携」と題して、島根県立浜田ろう学校校長である原田雅史先生の講義であった。中許善弘先生の演習では、まず「体験」から入り「理論」に向かわないと、子どもの課題発見から課題解決への意欲が育たず、結果的にスキルが定着しないということがよく分かった。特別支援教育は更に、「体験」→「理論」→「体験」という連続的・意図的に計画された学習配列から、知識やスキルを獲得していくことができるであろうと考える。原田校長からは、自分に足りない細やかさとアイデアを実現させていく行動力について示唆してもらった。主幹教諭としての視野を広げ、教員の勤務意欲増進と課題の整理、課題解決に向けての具体的な取り組みについて、今年度できるだけのことをしたいと思う。

(2) プログラム構成に関するもの

- ・ コース別研修では、教科内の情報交換を行う機会が多く、各学校で担当の先生方が困っている点や授

業に対するアイデアなどを意見交換できて大変良かったと思う。この点でも後期の研修は有意義であった。

- ・前期、後期の期間を含めて、「現場や研修期間中に実践したい課題」を設定した。学校現場では活動する際に何をすることも時間的・時期的に大変であり、なかなか研修・実践というわけにはいかない面がある。しかし、今回の研修を通じて、課題意識を持って教育に当たることの大切さと、教師としての責任を感じた。今後も、現任校の実態をふまえた上で、常に課題意識を持ち、情報を積極的に収集し、自己研鑽に努めたいと思う。
 - ・後期は、マネジメント上級コースであったが、講義内容について少し疑問を感じた。もちろんどれも今日的教育課題であり、全ての講義において学ぶべきことがたくさんあったが、学校マネジメントと直接的に関わる内容や演習がもっと組み込まれていたら良かったと感じる。
- ・後期2週間の講義も内容が盛りだくさんで、大変勉強になりました。ただ、マネジメントコースという面からすると、前期の研修のような内容が多かったらよかったです。
- ・特別支援教育の講義は内容的に重なるものが多く、もう少し整理して聞くことができればよかったです。「ものづくり」「食育」「安全教育」「伝統や文化に関する教育」「外国語活動」などの講義も聞いてみたいと思った。
- ・自己研修の時間を利用して、コース別の課題を話し合う時間をつくることができた点も良かった。教科に関する情報の入手方法や教員同士の学びの場をどう作っていくかなど、具体的な話ができ良かった。
- ・前期は19人の受講生で、同じ講義を受けているため、10日間という長い時間がありながら、なんとなく全体で動いている感じでした。しかし、後期は3つのコースに分かれたために、特に「理科コース」の人とは話が多くできた。6人という人数も良かった。また、個人的な受け止め方もかもしれないが、「理科コース」には、女性が2人おられたことも良かった。他のコースには、女性が1人や、おられないコースもあった。コース別に集まって話し合う時に、女性がおられて、しかも2人おられたというのはとても良かった。

(3) 研修全体の評価・感想等

- ・前後期の研修を通じて、19名の先生方との交流は時間が経つとともに広がりや深まりを見せ、同一校種の主幹教諭だけでなく、異校種の先生方とのネットワークも築くことができた。
- ・この研修で学んだことを学校現場で活かすとともに、今後スクールリーダーとして、微力ではあるが本県の学校教育の推進・充実に資するつもりである。
- ・教育全体を見ながら、今現実に勤務している学校や地域において、自分が何をすればよいかということ、研修後再度見直して見たいと思う。
- ・教育センターの指導主事の方との関わりを持つことで、いろいろな可能性が広がり、ヒューマンネットワークの構築に大変役立った。その点でも感謝したいと思う。
- ・4週間にわたる研修・講義で学んだ内容が、自分自身の成長につながり、少しでも子どもの教育や現場の先生方の役に立つようにしたいと思う。
- ・今回の現職教員研修は、同じ立場（主幹教諭）が多く集まったことで、今の役割・立ち位置といった面から情報交換ができ、仲間意識も芽生えたような気がしました。
- ・教職に就いてからは大学との交流はなかったので、島根大学で授業を受けられたことは新鮮でした。教職課程を持つ大学と、現場の教員とが研修・交流をするという島根大学の方針に共感しました。教

育を専門に研究する大学と教育を実践する現場との交流がなかったのも今から思えば不自然なことだったのかもしれませんが。ありがとうございました。

- ・学んできたことの職員への伝達も課題として残っている。現場で働いていると日々の忙しさからなかなか最新の動向まで気が回らない。少しでも先生がたへお返しができればと考えている。
- ・直接授業にかかわる内容についても情報交換ができて良かった。観察・実験でのほんのひと工夫や、材料の入手方法等について、教科一人の学校に勤務していると同じ教科の先生方と話す機会が少ないが、今回の研修を通して、ネットワークが広がったことは、自分にとっても大きな財産になる。
- ・前期、後期あわせて1カ月にわたる研修で得ることができたものは、自分にとってとても大きかった。研修の機会を作ってくださった方々に、とても感謝しています。ありがとうございました。
- ・今回の研修では、多くの講師の方に講義をいただいた。前・後期合わせて20日間で、多分40人くらいの方のお話を聞いたと思う。そんな中で、印象に残っている方もおられれば、ノートを見てもあまり思い出せない方もおられる。その違いについて考えてみると、自分がその方の話にどれだけ重要性を感じたかよりも、話し方（特に話し始め＝導入）によって、印象は随分と違う。気づいたのは、印象に残る話し方、心に響く話し方をされている方は、たとえ90分1コマのお話でも、まずご自身の話から入られている。自分がどんな人間で、どんな気持ちでそこに立っているということを聞くと、聞く側も安心して聞くことができるのだろう。振り返って、自分の授業ではどうだろうか、毎時間、身の上話をする必要はないが、毎時間いきなり「じゃ、この前の続きから・・・」と話し始めてはいなかったらどうか。若かったころの自分に比べて、最近の自分は、生徒に自分をさらけ出すことを避けているところはなかったらどうか。思い当たるところはたくさんある。今後活かしていきたいと思った。
- ・今回の研修で、いろいろな先生方と話げできたことは、自分にとって非常に有意義なものであった。同じような悩みを共有できたり、頑張っている先生方の様子を聞いたりする中で、自分の力のなさを痛感したりこれからやっていく勇気をいただいたりできた。今回の研修でできた絆を大切に今後つなげていきたい。
- ・前期に比べ後期は、似たような内容や特別支援教育になかなか落としきれない内容が多かったように思う。ただその中で、グループ課題に基づき、校種の違う教員の様々な考え方や立場に触れられたことは、前期同様大いに成果があったように思う。
- ・前期2週間・後期2週間の研修を終えて、これまで考えてこなかった主幹教諭の役割について深く考えることができた。校種や学校規模によって現在おかれている主幹教諭の状況はそれぞれ異なるが、教諭のまとめ役として、また学校組織のリーダーの一員として、その果たすべき役割の大きさを感じた。後期の研修では、それぞれの主幹教諭の本音や悩みがどんどん出され、県内の主幹教諭の置かれている状況を具体的につかむこともできた。学校組織マネジメントを主幹教諭の立場から考えると同時に、それぞれが教頭になった時、主幹教諭といっしょにどのように学校をマネジメントしていくのかという視点でも話し合いができた。
- ・現在、教育行政職にある私にとって、「主幹教諭を含めた管理職研修のあり方」をもう一度見つめ直す機会にもなった。講義を一方向的に受ける形だけの研修では生まれてこない「よりよい管理職のあり方」についての自分なりの考えを深めるには、今回の研修のようなテーマを絞って討議していく形で本音を引き出していけるような形の研修も取り入れていきたいと思った。学校現場の実態や悩みに応えるような教育センターとなれるように、努力していきたいと感じた。
- ・4週間の研修で、管理職として学校現場に戻っていく時に大いに役立つ学びをたくさんできた。物事

の見方や考え方を、自分なりに再点検できたことも大きかった。そして、一番の収穫は多くの主幹教諭の皆さんの本音と悩みに触れることができ、私自身が主幹教諭を含めた学校組織マネジメントを考え始める第一歩を踏み出せたことである。

- ・この研修を一言で表現するなら「つながる」であった。前期17講座、後期13講座。合わせて30講座受講したが、講師の先生は違うがどこかにつながっている。
- ・30年前に大学で勉強した経営学や経営管理論などについて、知識としてあるのに、生徒には教えることができても、自分の仕事に全然利用していなかったことに気付いた。いずれ現場に帰った時のために、かなり消化不良の面はあるが、講座の内容や大学で学んだことを振り返りながら、いろいろなことを考えてみたい。
- ・この研修を通して得られたことは「視野の拡大」、「自分自身が果たすべき役割の明確化」、「具体的な行動目標策定への情報収集と意欲喚起」。

5. 改善事項

- ・講義内容との重複が多いと感じた。たとえば、カリキュラム・マネジメントや発達障がいなど。研修講師が毎回違うので仕方のない面も理解できるし、同じ内容を2度聞くと理解が深まるというメリットもあるが、できるだけ講義内容の調整をお願いしたい。
- ・自己研修の時間に他のコースの講義を希望して受講したので、ほとんどの日が4コマまるまるうまる状態であった。研修レポートを作成するのが帰宅後になり、負担感が大きかった。前期のように、少しゆとりをもった研修日程にしてほしかった。
- ・自分のコース以外の講義を選択するとき、講義名だけでなくある程度講義内容も分かっていると選択しやすいと思った。
- ・冬季の研修は雪などで通うことが大変だった。例えば6月に2週間、11月に2週間のような日程だとよかったと思った。
- ・前期に比べて、講義を聴くことにはかなり慣れてきたと感じます。充実した内容の講義が多く、消化しきれない気もします。講義を聴いた後、マネジメントに関するテーマに関しては参加者どうしのディスカッションの時間を時々とっていただけると、自分が理解できていない点が発見できたり、ほかの先生の新たな意見が聞けたり、頭の中を整理できたりと、内容の理解・消化に役立つように感じます。今後はそのような時間を1週に1度程度でもとっていただくと、より実践的な知見も得られるのかなと思いました。
- ・後期の研修については、理科教育に関する講義・実習内容が多く、ありがたかった。ただ、6名の理科メンバーで、もっと情報交換する時間が担保されているとよかった。
- ・研修全体を通して、内容の濃い素晴らしいものでした。その日受けた研修内容は、聞いたそのままでは自分のものになりません。そのため、4コマ目は毎日自己研修として、受けた研修内容の整理・振り返りに充てたほうが研修効果があるのではないかともしました。

IV まとめ

1. 受講生からの評価について

- ・今回の前期・後期の4週間の研修について、受講生からは、概ね有意義という評価であった。講師が異口同音で話す内容について、しっかりと受け止め、それを今後の教育活動に生かす方策を、おのおのが考えていることがわかった。
- ・学校という組織にあって、マネジメントがいかに重要であるかを理解することにより、学校が機能的に働き、子どもたちの教育がスムーズに行われることがわかるなど、研修の効果は非常に大きかったのではないと思われる。
- ・最新の情報、今まで思いもつかなかった考え方に触れることにより、学校運営を含めた新しい試みができることにも繋がっていると考えられる。
- ・自己研修の時間も少なかったとはいえ、受講した講義内容をしっかり整理する時間や、個々の課題について、受講生間で論議するなど、有効に機能したと考えられる。講義を日程上、すべて詰め込むことでなく、省察できる時間を確保することは、講義内容の理解を深める意味でも有効である。
- ・同校種は元より、受講生19名が校種を超えて繋がりができ、学校教育の一貫性を理解できたのではないか。その理解や繋がりが様々なところで機能していくと十分に考えられる。
- ・各受講生は、本研修を通して学んだことを、それぞれの学校へと持ち帰り、後輩に伝達していくことの重要性に気が付いていた。

2. 改善事項について

- ・前期、後期と4週間の長期研修であったことから、マネジメント研修というプログラム構成上、多少の内容が重なることは確かであるが、受講生からの感想にもあるように、それを前向きにとらえている者もあり、一概に悪いとは言えないと考えられる。しかしながら、内容の調整は今後、検討すべき課題となる。
- ・自己研修時間の設定であるが、講師の時間の都合もあり、まったく設定できない日があるなど、受講生にとっては多少受講しづらいことがあったようである。受講生の記述にもあるとおり、一律、最後の時間は自己研修ということも検討すべき課題になる。

3. 今後の課題

- ・プログラミングに置いて、なるべく、同じような内容の講義が重ならないように配慮すべきかもしれない。研修を主催する方では、違う切口での講義と想定していても、受講生では、そのように受け取れない可能性もあり、そこは受講前にしっかりと意味づけを理解させるなど、今後配慮が必要である。
- ・大きな意味でのマネジメントの観点から、喫緊の課題（食育、外国語活動等）についても余裕があれば、研修内容として含めることも検討する必要がある。
- ・自己研修時間の利用については、受講生の自主性を尊重し、その使用については判断を任せたところであったが、少しは主催者側で仕掛けをつくり、交流させることも必要でないかと思う。また、その時間の設定も講義の最後のコマにするなどの工夫が必要になる。
- ・学校種ごとの考えや文化が壁をつくり、児童生徒の育みに矛盾を生じさせていることもあり、今後の研修では、講義内容も含め交流の時間を設定するなど、「生きる力」を持つ児童生徒の育成のために、キャリア教育の観点からも、より相互理解が進むような研修のあり方を検討する必要がある。

- ・今まで大学と教育現場（教育委員会）とが交流がなかったことが不思議であるという受講生の声があったことから、大学と教育現場（教育委員会）が、研修の面でより一層の協力関係、協働ができるよう、関係を強化する必要がある。
- ・本研修では、三つのコース（「マネジメント上級コース」、「教科指導・理科コース」、「特別支援教育コース」）を設定したが、今後はこれらのコースをも再検討することで、より有意義な研修を実現していくことができると思う。

「スクール・マネジメントの実践的課題 ー学校の現代的課題を解明するー」

開講の趣旨

多様かつ複雑に変化する現代社会にあつて、教職の専門性の内実を構成する「教育的知見」もまた、絶えずリニューアルすることが求められる。特に、学校教育の指導的人材となることが期待される現職教員にとって、最新の理論に基づく新たな教育課題の発見と課題解決に資する教育的実践力の高度化は必須の研修課題である。

島根大学教育学部と島根県教育委員会は、こうした観点から、共同して比較的長期にわたる現職教員の大学への派遣および受け入れ体制を構築して、「大学と行政が協同して取り組む現職教員研修プログラム」を実施することとした。

1. 本現職教員研修事業は、平成22年度試行事業を経て、いよいよ平成23年度から本格実施の段階に入ることとなる。
2. 本現職研修事業は、大学院レベルの講義及び演習で構成され、受講修了者には「修了書」を授与する(今後、15時間1単位を取得したものと見なして記録にとどめる方策を検討する)。
3. 本現職教員研修事業は、講義・演習・実習の特別カリキュラムとして開講し、教育学部および研究科に在籍する学生の聴講を認め、現職教員と学生の学修を通じた交流を実現する。
4. 主催:島根大学教育学部 共催:島根県教育委員会

平成23年度事業の概要

1. 講座の名称および内容 : 「スクール・マネジメントの実践的課題 ー学校の現代的課題を解明するー」
本プログラムは、中堅以上の現職教員が習得することを期待される「学校経営の能力」および「学校教育の現代的課題の理解と実践的力量」を主題とし「学校経営」・「特別支援教育」・「教科指導」の各分野を網羅した研修内容を準備する。(具体的な研修プログラムは、今後検討。)
2. 受講対象者(研修派遣教員) : 「現職の主幹教諭及び候補者、ミドルリーダーとして期待される中堅教員」
小・中学校および高等学校教員、特別支援学校教員および指導主事(概ね、35歳以上の教員)等とし、教育学部学生、研究生および大学院生の聴講も認める。
3. 研修期間・場所、受講料 :
前期:平成23年11月7日(月)~11月18日(金)
後期:平成24年1月30日(月)~2月10日(金)の2期4週間、島根大学教育学部棟講義室を会場として実施する。
受講料は無料とする。(実習教材費等については実費を徴収することがある)
4. 研修プログラム :
 - ①島根大学教育学部において作成する「特別プログラム」
前期:スクールマネジメントベーシックコース
後期:スクールマネジメントアドバンスコース(「マネジメント上級」,「特別支援教育」,「教科指導」の3コース)
(「教科指導」の教科については、本年度は「理科」として、以後は他の教科とローテーションする。)
 - ②研修期間中に 総計120時間(90分×30コマ,「自己学修・個別指導・相談」を含む)
 - ③研修プログラムは、15コマ程度/週の「講義・演習・実習」,「自己学修・個別指導・相談」等で構成する。
5. 履修証明制度の活用 :
研修プログラムは、将来、15時間を1単位とする「履修証明プログラム」として構成することとし、平成23年度プログラムにおいては、原則として、すべての研修プログラムに参加することを条件に「修了証」を発行する。
6. 講師・指導者 :
教育学部教員を中心とし、県教育委員会職員、学外者(国の機関、他大学教員等)、退職教員等、専門的かつ受講者の学修ニーズに対応できる講師を選任し、招聘する。
7. その他 :
 - ①講義室、研修生研究室(控え室)等は別途指示する。
 - ②本研修の事務および研修生への対応は、教育学部附属教師教育研究センターにおいて行う。

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(マネジメント上級) 日程表

	1/30(月)	1/31(火)	2/1(水)	2/2(木)	2/3(金)
1 10:15 ~ 11:45	オリエンテーション 課題・成果・実践の発表・討議	カリキュラム・マネジメント の実際 千葉大学教育学部教授 天笠 茂	危機管理のための リスクマネジメント 高崎市教育委員会教育長 飯野 眞幸	「人生は選択の連続だ」 公益社団法人ジュニアアチー ブメント日本 専務理事 中許 善弘	小中一貫(連携)教育による 学校づくり 松江市立八束学園校長 岩田 靖
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	212研修室
2 12:45 ~ 14:15	課題・成果・実践の発表・討議	同 上	同 上	同 上	同 上
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	212研修室
3 14:30 ~ 16:00	同 上	自己研修	地域の教育力と学校の役割 (仮) 松江市立朝酌小学校長 川上 洋子	同 上	学校組織を生かした 学校評価の在り方 筑波大学大学院教授 浜田 博文
	517多目的ホール	517多目的ホール	212研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ~ 17:45	同 上	自己研修	同 上	自己研修	同 上
	517多目的ホール	517多目的ホール	212研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(マネジメント上級) 日程表

	2/6(月)	2/7(火)	2/8(水)	2/9(木)	2/10(金)
1 10:15 ~ 11:45	キャリア教育とこれからの 学校教育のあり方 文部科学省児童生徒課 生徒指導調査官 藤田 晃之	教科指導力向上のための 授業研究のあり方 島根大学教育学部教授 加藤 寿朗	自己研修	実習体験: 「環境寺子屋」の活動 島根大学教育学部准教授 松本 一郎 ほか	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	212研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
2 12:45 ~ 14:15	同 上	同 上	自己研修	同 上	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	212研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
3 14:30 ~ 16:00	理科教材開発の最前線—JST 理科教育支援センターの活動— (独)科学技術振興機構 理数学習支援部 調査員 永松 誠司	自己研修	発達障害を考える新たな視点 中京大学心理学部教授 鯨岡 峻	自己研修	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ~ 17:45	同 上	自己研修	同 上	自己研修	閉講式
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(教科指導・理科) 日程表

	1/30(月)	1/31(火)	2/1(水)	2/2(木)	2/3(金)
1 10:15 ～ 11:45	オリエンテーション 課題・成果・実践の発表・討議	カリキュラム・マネジメント の実際 千葉大学教育学部教授 天笠 茂	危機管理のための リスクマネジメント 高崎市教育委員会教育長 飯野 眞幸	「人生は選択の連続だ」 公益社団法人ジュニアアチー ブメント日本 専務理事 中許 善弘	放射線の性質と健康影響 島根大学教育学部教授 秋重 幸邦 放射線利用振興協会 松鶴 秀夫
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	G42多目的研修室
2 12:45 ～ 14:15	課題・成果・実践の発表・討議	同 上	同 上	同 上	(実習)放射線の測定 島根大学教育学部教授 秋重 幸邦 放射線利用振興協会 松鶴 秀夫 平根 廣之
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	G42多目的研修室
3 14:30 ～ 16:00	同 上	自己研修	南極の生物と自然環境 —南極から自然環境を見る— 島根大学教育学部教授 大谷 修司	同 上	学校組織を生かした 学校評価の在り方 筑波大学大学院教授 浜田 博文
	517多目的ホール	517多目的ホール	G42多目的研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ～ 17:45	同 上	自己研修	自己研修	自己研修	同 上
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(教科指導・理科) 日程表

	2/6(月)	2/7(火)	2/8(水)	2/9(木)	2/10(金)
1 10:15 ~ 11:45	キャリア教育とこれからの 学校教育のあり方 文部科学省児童生徒課 生徒指導調査官 藤田 晃之	学習指導要領改訂からみる これからの理科教育 文部科学省初等中等教育局 視学官 日置 光久	指導要領改訂を踏まえた 理科教育の進め方 NPO子ども・宇宙・未来の会 理事 遠藤 純夫	実習体験: 「環境寺子屋」の活動 島根大学教育学部准教授 松本 一郎 ほか	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	G42多目的研修室	G42多目的研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
2 12:45 ~ 14:15	同 上	同 上	同 上	同 上	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	G42多目的研修室	G42多目的研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
3 14:30 ~ 16:00	理科教材開発の最前線—JST 理科教育支援センターの活動— (独)科学技術振興機構 理数学習支援部 調査員 永松 誠司	自己研修	発達障害を考える新たな視点 中京大学心理学部教授 鯨岡 峻	自己研修	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ~ 17:45	同 上	自己研修	同 上	自己研修	閉講式
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(特別支援教育) 日程表

	1/30(月)	1/31(火)	2/1(水)	2/2(木)	2/3(金)
1 10:15 ～ 11:45	オリエンテーション 課題・成果・実践の発表・討議	カリキュラム・マネジメント の実際 千葉大学教育学部教授 天笠 茂	危機管理のための リスクマネジメント 高崎市教育委員会教育長 飯野 眞幸	「人生は選択の連続だ」 公益社団法人ジュニアアチー ブメント日本 専務理事 中許 善弘	自己研修
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
2 12:45 ～ 14:15	課題・成果・実践の発表・討議	同 上	同 上	同 上	自己研修
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
3 14:30 ～ 16:00	同 上	児童生徒の発達に対する理解 —精神医学的立場から— 島根大学教育学部教授 稲垣 卓司	自己研修	同 上	学校組織を生かした 学校評価の在り方 筑波大学大学院教授 浜田 博文
	517多目的ホール	212研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ～ 17:45	同 上	同 上	自己研修	自己研修	同 上
	517多目的ホール	265研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(特別支援教育) 日程表

	2/6(月)	2/7(火)	2/8(水)	2/9(木)	2/10(金)
1 10:15 ~ 11:45	キャリア教育とこれからの 学校教育のあり方 文部科学省児童生徒課 生徒指導調査官 藤田 晃之	自己研修	自己研修	実習体験: 「環境寺子屋」の活動 島根大学教育学部准教授 松本 一郎 ほか	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
2 12:45 ~ 14:15	同 上	自己研修	特別支援学校長からみた 学校連携 島根県立浜田ろう学校長 原田 雅史	同 上	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	517多目的ホール	265研修室	517多目的ホール	517多目的ホール
3 14:30 ~ 16:00	理科教材開発の最前線—JST 理科教育支援センターの活動— (独)科学技術振興機構 理数学習支援部 調査員 永松 誠司	発達に障害のある子どもたち の支援—工学的立場から— 島根大学総合理工学部教授 縄手 雅彦	発達障害を考える新たな視点 中京大学心理学部教授 鯨岡 峻	自己研修	自己研修(研修のまとめ)
	517多目的ホール	265研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
4 16:15 ~ 17:45	同 上	同 上	同 上	自己研修	閉講式
	517多目的ホール	265研修室	517多目的ホール	517多目的ホール	517多目的ホール
備考					

1月30日（月）の予定

時 間・会 場	内 容
10:15～ 10:45 会場：517	オリエンテーション
10:50～ 16:00 （昼食、休憩は適宜と ること） 会場：1G 517 2G 265 3G G42	課題・成果・実践発表会 ・3グループに分かれ、行う（グループ分けは別紙参照）。 ・司会・記録役を最初に決め、発表時間等、時間配分をそれぞれ決めること。 ・最初に受講生それぞれの発表を行い、そこから共通の課題を設定し、討論すること。 ・グループの記録は、2月1日までに事務局（センター）へ提出すること。 ・この時間は、センター教員、県教委からそれぞれ1名ずつオブザーバーとして参加予定
16:10～ 17:00 会場：517	後期研修での自己の研修課題の設定を行う。 ※研修期間中、それぞれコースに、課題に取り組む際のアドバイザーをセンター教員が行う。アドバイス等、必要な場合は、適宜それぞれの教員に相談すること。 マネジメント上級コース：塩津 理科コース：権藤 特別支援コース：金子
17:05～ 17:45 会場：マネ 517 理科 265 特支 G42	コースごとにグループ討議（グループ研修課題設定） ※討議内容 コースの代表者を決め、コース内での課題を設定する。 （上記の自己研修の課題とは別） ・自己研修の時間などを利用し、適宜、話し合いを行う。 ・上記のアドバイザーを利用することも可。

H23島根大学教育学部現職教員研修(後期)全コース日程一覧

	マネジメント上級					教科指導・理科					特別支援教育				
	講習名	会場	所属	職名	氏名	講習名	会場	所属	職名	氏名	講習名	会場	所属	職名	氏名
1月30日	1	オリエンテーション	517			オリエンテーション	517				オリエンテーション	517			
	2														
	3	課題・成果・実践の発表・討議	517			課題・成果・実践の発表・討議	517				課題・成果・実践の発表・討議	517			
	4														
1月31日	1	カリキュラム・マネジメントの実践	517	千葉大学教育学部	教授 天笠 茂	カリキュラム・マネジメントの実践	517	千葉大学教育学部	教授 天笠 茂	カリキュラム・マネジメントの実践	517	千葉大学教育学部	教授 天笠 茂		
	2														
	3	自己研修	517			自己研修	517				児童生徒の発達に対する理解—精神医学的立場から—	265	教育学部	教授 稲垣 卓司	
	4	自己研修	517			自己研修	517								
2月1日	1	危機管理のためのリスクマネジメント	517	高崎市教育委員会	教育長 飯野 眞幸	危機管理のためのリスクマネジメント	517	高崎市教育委員会	教育長 飯野 眞幸	危機管理のためのリスクマネジメント	517	高崎市教育委員会	教育長 飯野 眞幸		
	2														
	3	地域の教育力と学校の役割(仮)	212	松江市立朝酌小学校	校長 川上 洋子	南極の生物と自然環境—南極から地球環境を見る—	G42	教育学部	教授 大谷 修司	自己研修	517				
	4					自己研修	517			自己研修	517				
2月2日	1														
	2	人生は選択の連続だ	517	公益社団法人ジュニアアチーブメント日本	中許 善弘	人生は選択の連続だ	517	公益社団法人ジュニアアチーブメント日本	中許 善弘	人生は選択の連続だ	517	公益社団法人ジュニアアチーブメント日本	中許 善弘		
	3														
	4	自己研修	517			自己研修	517			自己研修	517				
2月3日	1														
	2	小中一貫(連携)教育による学校づくり	212	松江市立八東学園	校長 岩田 靖	放射線の性質と健康影響	G42	教育学部	教授 秋重 幸邦 放射線利用振興協会 松鶴 秀夫	自己研修	517				
	3					放射線の測定	G42	教育学部	教授 秋重 幸邦 放射線利用振興協会 松鶴 秀夫 放射線利用振興協会 平根 廣之	自己研修	517				
	4	学校組織を生かした学校評価の在り方	517	筑波大学大学院	教授 浜田 博文	学校組織を生かした学校評価の在り方	517	筑波大学大学院	教授 浜田 博文	学校組織を生かした学校評価の在り方	517	筑波大学大学院	教授 浜田 博文		
2月6日	1	キャリア教育とこれからの学校教育のあり方	517	文部科学省初等中等教育局児童生徒課	生徒指導調査官 藤田 晃之	キャリア教育とこれからの学校教育のあり方	517	文部科学省初等中等教育局児童生徒課	生徒指導調査官 藤田 晃之	キャリア教育とこれからの学校教育のあり方	517	文部科学省初等中等教育局児童生徒課	生徒指導調査官 藤田 晃之		
	2														
	3	理科教育開発の最前線—JST理科教育支援センターの活動—	517	(独)科学技術振興機構理数学習支援部	永松 誠司	理科教育開発の最前線—JST理科教育支援センターの活動—	517	(独)科学技術振興機構理数学習支援部	永松 誠司	理科教育開発の最前線—JST理科教育支援センターの活動—	517	(独)科学技術振興機構理数学習支援部	永松 誠司		
	4														
2月7日	1	教科指導力向上のための授業研究のあり方	212	教育学部	教授 加藤 寿朗	学習指導要領改訂からみるこれからの理科教育	G42	文部科学省初等中等教育局	視学官 日置 光久	自己研修	517				
	2									自己研修	517				
	3	自己研修	517			自己研修	517			発達に障害のある子どもたちの支援—工学的立場から—	265	総合理工学部	教授 縄手 雅彦		
	4	自己研修	517			自己研修	517								
2月8日	1	自己研修	517			指導要領改訂を踏まえた理科教育の進め方	G42	特定非営利活動法人子ども・宇宙・未来の会	理事 遠藤 純夫	自己研修	517				
	2	自己研修	517							特別支援学校長からみた学校連携	265	鳥根県立浜田ろう学校	校長 原田 雅史		
	3	発達障害を考える新たな視点	517	中京大学心理学部	教授 鯨岡 峻	発達障害を考える新たな視点	517	中京大学心理学部	教授 鯨岡 峻	発達障害を考える新たな視点	517	中京大学心理学部	教授 鯨岡 峻		
	4														
2月9日	1	実習体験:「環境寺子屋」の活動	517	教育学部	准教授 松本 一郎	実習体験:「環境寺子屋」の活動	517	教育学部	准教授 松本 一郎	実習体験:「環境寺子屋」の活動	517	教育学部	准教授 松本 一郎		
	2														
	3	自己研修	517			自己研修	517			自己研修	517				
	4	自己研修	517			自己研修	517			自己研修	517				
2月10日	1														
	2	自己研修(研修のまとめ)	517			自己研修(研修のまとめ)	517			自己研修(研修のまとめ)	517				
	3														
	4	閉講式	517			閉講式	517			閉講式	517				

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(ベーシックコース) 日程表

	11/7(月)	11/8(火)	11/9(水)	11/10(木)	11/11(金)
1 10:15 ～ 11:45	開講式 ・ オリエンテーション	学校マネジメント計画 -学校の組織力向上と スクールリーダーの役割- 国士舘大学教授 北神 正行	学校間接続の課題 -幼・小の連携を中心として- 島根大学教育学部教授 肥後 功一	学校経営のあり方 -養護教諭の立場から- 松江市立八束中学校養護教 諭 福原 光江	学校マネジメントからみた授業 研究 島根大学教育学部教授 権藤 誠剛
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
2 12:45 ～ 14:15	島根県の現職教員研修体系 がめざすもの 島根県教育センター 所長 三島 修治	同 上	特別支援教育の視点から見た 学校改革 島根大学教育学部教授 小川 巖	同 上	同 上
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
3 14:30 ～ 16:00	子どもと保護者の 現状を理解する 島根大学教育学部教授 岩宮 恵子	企業における人材育成の在り 方(仮) 島根電工株式会社 取締役会長 陶山 秀樹	島根県の特別支援教育 島根県教育庁 特別支援教育室長 助川 隆	新学習指導要領を読み解く -教育課程経営の課題- 島根大学教育学部講師 熊丸 真太郎	自 己 研 修
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
4 16:15 ～ 17:45	自 己 研 修	自 己 研 修	自 己 研 修	同 上	島大生との交流
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
備考					

＜注 記＞ 会場は、原則として、教育学部多目的ホール(517)とし、特別教室等の使用および教室変更についてはその都度連絡する。

研修生研究室は、同じく教育学部多目的ホール(517)とする。

「自己研修」の活用については、研修開始後に改めて相談する。

平成23年度島根大学教育学部現職教員研修(ベーシックコース) 日程表

	11/14(月)	11/15(火)	11/16(水)	11/17(木)	11/18(金)
1 10:15 ～ 11:45	分かりやすい学校経営を進める管理職のあり方 松江市立中央小学校長 長 和博	自己研修	地域とともにある学校づくり 文部科学省初等中等教育局 参事官付 学校運営支援企画官 松浦 晃幸	生徒指導を理解する －生徒指導提要から－ 国立教育政策研究所生徒指導 研究センター総括研究官 滝 充	研修のまとめ・課題整理
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	研修室(212)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
2 12:45 ～ 14:15	同上	自己研修	自己研修	同上	政策動向： 教員の養成・研修制度の改善 教員研修センター理事 高岡 信也
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
3 14:30 ～ 16:00	自己研修	宇宙教育をめぐる諸問題 宇宙航空研究開発機構名誉 教授・技術参与 的 川 泰 宣	宇宙教育と学校教育 島根大学教育学部准教授 百合田 真樹人	学校管理と法令 島根県教育庁高校教育課 企画人事主事 宮島 忠史 義務教育課 企画人事主事 門脇 岳彦	研修のまとめ・課題整理
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
4 16:15 ～ 17:45	自己研修	同上	自己研修	同上	研修のまとめ・課題整理
	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)	多目的ホール(517)
備考					

研修前半（後半）を終えての感想 ー何を学び、何を考えたかー

番号 _____ 氏名 _____

11月 7日（月） ～ 11月 11日（金）

学びの成果，実践上の課題の理解 さらに深めたい内容等	
<p>講義等の内容について、自身の感想，身につけることができた知見，もう少し聞きたかった点等を記載して下さい。 （箇条書き等，自身の研修の成果を備忘録として整理しやすい方法で記述して下さい）</p> <p>※11月14日からの研修についても、同様に作成してください。</p>	<p>記入例</p> <p>1. 講義題目「〇〇〇〇」（△△講師）について</p> <p>①・・・・・・・・・・・・・・・・</p> <p>②・・・・・・・・・・・・・・・・</p>

	研修を受講する上での要望，改善の必要のある事項等
<p>講義等を受講する際に不便を感じたり，改善してほしい事項等を記載して下さい。</p>	

	研修全体を通じての感想等
<p>上記以外，研修前半を終えての全般的な感想を記載して下さい。</p>	

後期の研修に向けて－現場で実践する課題について－

番号 _____ 氏名 _____

	前期の研修を受講し、後期の受講に向け、学校現場において実践する課題について
<p>11月の研修を受講し、そこで学んだことを現場でどのように実践するかについて、記入してください。</p> <p>実践の結果については、来年1月の研修時に発表・討議していただく予定です。</p>	

研修課題 「主幹教諭の役割・立ち位置とは」

マネジメントグループは8人のうち7人が主幹教諭である。学校種、学校規模、自校昇任か異動しての昇任か、命を受けた職務の内容など一人一人の置かれている状況はそれぞれ違う。しかし、学校という組織が機能を発揮するための主幹教諭としての役割については共通したものがあるのではないであろうか。今後、意見交換・議論を深め、よりよい主幹教諭の役割を探っていききたい。

グループ協議

主幹教諭に求められる役割に校長（教頭）と全職員をつなぐパイプ役としての役目がある。具体的には、学校教育目標や校長の方針を全職員で共通理解を図ったり、職員の思いをまとめて校長・教頭に伝えたりする場面が考えられる。その際、主幹教諭としてどのようなことに心がけているか、どのように感じたか、次のような意見が出た。

- ・つなぐためには「場」が必要。学年主任者会をその場と捉え、主幹教諭が話を進めている。
- ・異動昇任しての主幹教諭であったため、校長の方針も、学校の様子も何もわからないままスタートしてしまった。分かってくるにしたがって、つなぎ役としての意識も少しずつ出てきた。
- ・具現化といっても、始めは何をすればよいかという感じでよく分からなかった。今は、分掌主任を統括する立場で各分掌の課題を拾い上げ、対応についての指導や支援をしている。来年度に向けて課題と方針の指導もしている。
- ・すべての分掌のまとめ役をすると、教頭の仕事と重なってくるのではないか。
- ・生徒指導を担当していても教頭の職務と重なる部分もあるが、一応生徒指導に関する事項については主幹教諭を窓口にしている。
- ・校長がかわったため、方針を全職員が十分に理解しないままスタートしてしまい、共通理解できずにいた。
- ・教諭の立場からすると、管理職に比べ主幹教諭の方が話しやすいように思う。卒業式の話し合いで、校長と職員の意識の違いから関係がぎくしゃくしてしまった。つなぐ立場からすると溝は作りたくない。
- ・卒業式の形態が数年で変わる例は経験したが、あまりころころ変わると保護者からの信頼感が失われてしまうという校長の意見は納得できるものであった。十分に話し合うことで落としどころが見つかるように思う。

- ・校長と職員の意見が割れたとき、主幹教諭としてはどのような態度をとるべきか。
- ・校長と教頭は一体であるべき。主幹教諭も基本的には校長の方針を伝える側に立つべきではないか。
- ・教諭のまとめ役でもあるので自分は教諭側に立ちたい。
- ・ぶつかってからでは遅い。ぶつかる前の調整役として活躍すべき。
- ・教頭や主幹教諭が「ごめんね」と謝って回るしか解決の方法はないかもしれない。
- ・日常での関わりを深く作っておけば納得してもらいやすいのではないか。納得してもらえよう日常のコミュニケーションを大切にしていきたい。
- ・教頭との関係が話題に出たが、なかなか情報がもらえないことに苦労している。自分の知らないうちに事が決まってしまうこともあった。
- ・特別支援学校は特に校長と教頭が一体となる傾向にある。主幹教諭は任期も短く、新しい提案をしても根付かせる時間がない。
- ・主幹教諭である自分を職員に信用してもらわないとダメ。教頭はある面権限を持っているので発信も容易だが、主幹教諭は信頼を得てからでないと発信は難しい。
- ・教頭のフォローも主幹教諭の大切な役割。
- ・自校ではシステムとして主幹教諭が位置付けられているため、誰が来ても大丈夫だと思う。本校は分教室が3つあり、そのどれかを任せてもらってもいいと考えていた。とにかく教頭が忙しすぎて学校が回らない面がある。分掌の統括は主幹教諭がと割り切っているのでもうまく回っているのではないか。
- ・自分の学校では分掌の統括まですると、教頭の仕事とかぶってしまう。
- ・校長の立場からすると、主幹教諭のベストポジションはその時その時の学校の状況で変わってくる。その状況を見極め、立ち位置を決めてあげないと信頼は得られないと思う。
- ・主幹教諭の制度が始まったばかりで校長先生方も活用の仕方を探っている段階。将来、我々が管理職となったときは、自分の経験を生かすことができるのではないか。

まとめ

今回、主幹教諭の役割・立ち位置について話し合いを進めてきた。それぞれが置かれている状況が全く違い、結論を得るところまでには至らなかった。しかし、「つなぎ役としてのコミュニケーションの大切さ」「校長と職員の意見が分かれたときの対応」「教頭との関係」「システムとしての位置づけと人としての信頼感」など有意義な話し合いになった。

組織マネジメントに一般解はないという話があった。主幹教諭の立ち位置も同じである。学校の置かれている状況、職員の資質や意識はそれぞれ違い個別具体的である。今後現場に帰り、自分の置かれた状況の中で、学校が組織として成果を上げることのできるよう自分の立ち位置を探っていきたい。

教科指導・理科コース「研修課題レポート」

○討議日：1月30日（月）、2月9日（木）

○討議内容：理科教育をめぐる課題をあげ、それらのうち教員の課題の中から、情報入手、校内の同僚理科教員との連携を中心にて話し合い、情報交換を行った。その他、実験方法や実験材料についての情報交換も行った。

1. 理科教育をめぐる課題

- 〔児童生徒〕 ・学習内容が定着しない ・体験不足 ・考える力（思考力）の低下
・数学的計算力の低下（分数、小数） 等
- 〔教 員〕 ・準備時間が少ない ・時数確保がたいへん ・情報入手に困る
・校内の同僚理科教員との連携がうまくいかない 等

2. 情報入手に係る協議

- ① 情報を入手する主な方法として、メンバーが主に利用している方法は？
- ・理科関連雑誌（理科の教育、理科教室、RikaTan、Newton 等）
 - ・新聞記事等（理科関係に記事を集めた冊子あり）
 - ・インターネット ・メーリングリスト（新理科教育 ML）
- ② 施設ではどのようなところがある？
- ・三瓶自然館サヒメル(送迎バスあり) ・出雲科学館 ・日原天文台
 - ・しまね海洋館アクアス ・宍道湖自然館ゴビウス ・松江气象台
 - ・島根県教育センター（研修講座） ・松江工業専門学校（出前授業）
- ③ ネットワークづくりが必要では？
- ・児童生徒9年間を核にしてつながっていくとよい。
 - ・実験について気軽に聞ける体制づくりができるとよい。
 - ・市郡教研や県理研等の枠ではなく、地域を越え、校種を越えた理科教員の研修の場があるとよい。

※①～③について話し合い、情報交換をする中で、メンバーそれぞれが工夫・努力していることや事例を紹介し合い、日々の授業の改善につながる数多くの学びがあった。

3. 校内の同僚理科教員との連携に係る協議

① 現状について

- ・理科教員が1名の学校が多くなってきている。
- ・大規模中学校では、1・2・3年すべての学年にまたがって担当するのは負担大。
- ・中には、学年を自分一人で担当したがる理科教員もいる。
- ・学校の事情によりやむを得ず学年一人体制を取らざるを得ない学校もある。
- ・同じ学年を担当する者どうしで、単元を見通した申し合わせを行っている。
- ・近隣の理科教員一人配置校の初任者から質問を受けている。

② 同僚理科教員への援助について

- ・同僚理科教員の資質向上を支援するよい機会は、上記のような打ち合わせや、定期試験のための問作会議ではないか。
- ・我々は、授業打ち合わせや試験問作会議において、同僚理科教員の援助を意識したほうがよい。
- ・同僚と協議する過程で教材や授業展開等と向き合うことが授業改善につながり、互いに高め合うことができるだろう。

③ その他

- ・学校全体の理科教育、地域の理科教育、島根県の理科教育の向上という視点を持つ。

4. 実験方法や実験材料についての情報交換

①酸化鉄の還元実験、光合成の実験

②ブタの臓器供給…島根県食肉公社（大田市） その他多数

コース別課題のまとめ（特別支援教育コース）

◎実施内容：特別支援教育に関する勉強会 2月2日（木）

講師：FD戦略室 原広治教授

～「特別支援教育の推進について（平成19年 文部科学省通知）」より～

1 特別支援教育の理念

特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害を含めて、特別な支援を要する幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。

2 校長の責務

3 特別支援教育を行うための体制の整備及び必要な取組

(1) 校内委員会の設置

(2) 実態把握

(3) 特別支援教育コーディネーターの指名

→校内委員会・校内研修・関係諸機関との連絡調整・相談窓口

(4) 個別の教育支援計画 → 幼・小・中・高への引き継ぎ

(5) 個別の指導計画

(6) 教員の専門性の向上

4 特別支援学校における取組 →地域におけるセンター的機能

5 教育委員会等における支援

6 保護者からの相談への対応・早期からの連携

7 留意事項 → 入試等での配慮 交流及び共同学習 支援員等の活用

～協議より～

○高等学校での特別支援教育のありかた

- ・高校進学者の約2%が支援を要する生徒（主としてADHD）。
- ・中学校との連携が進んでいない（個別の教育支援計画の引き継ぎ等）。

○コーディネーターの配置について

- ・コーディネーターを上手く活用できている学校とそうでない学校がある。
- ・主幹教諭、教頭など担任を持っていない教員が動きやすい。

○支援員の活用

- ・市町村の方針で配置が決まる。
- ・23年度より幼稚園・高等学校でも支援員の配置が予算化された。（高校：全国で500人）

特別支援教育は特別なことをする教育ではなく、普通のことをより丁寧にする教育である。

カリキュラム・マネジメントの実際

天 笠 茂 (千葉大学)

【Part 1】 集合体から組織体へー協働による学校づくりを：つなげる、つながるー

1. それぞれが頑張っている集合体ー学校組織の特質ー

それは、一言でいうならば、一人一人の教職員にとって自律度の高い組織とすることができる。授業をはじめとする教育活動の場面において、それぞれの教職員が自らの判断のもとに進めて姿に様々に遭遇するなど、学校組織は、その構成員である教職員に自ら判断する余地を多分に担保しているところにその特徴がみられる。しかし、このような特質は、学校をして組織体としてとらえた時、そこに様々に課題を抱えた姿を見せることになる。たとえば、それぞれの教室における学級経営や授業の取り組みが、見方によっては、他との関係を欠いた個々人の営みとしてとらえられるのである。さらに、いうならば、その自律度の高さが、互いの干渉を許さないという姿となり、そのことが一人一人の孤立度を高めるという方向に進むことも時に見られる。

2. 第三者評価の試行事業に参加して

- (1) それぞれがそれぞれに
- (2) 授業、学級経営をめぐる力量差ー授業力、学級経営力を育てる学校のカー
- (3) 組織としての機能の程度
- (4) 地域との関係

3. 学校を組織体にーミドル層の形成：タテ・ヨコのライン

4. 学校にマネジメントを

- (1) 協働による学校づくりをー目標とコミュニケーションと協働意欲ー
- (2) 組織機能をどう充実させるか

- ①カリキュラム・マネジメントの推進をはかる組織の設計
- ②意思形成システムの整備と意思決定のスピードアップ
- ③校長・教頭を支える主任の在り方を見直す
- ④学校事務処理体制の整備をはかる
- ⑤校長に求められる学校経営のビジョンや方針の提示

5. 学校組織のマネジメントー7つのツールー

- (1) わが校を診る
- (2) 目標・方針、教育理念、校訓、経営戦略、グランドデザイン、経営計画
- (3) カリキュラム・マネジメント
- (4) 機能する組織：意思決定
- (5) 学ぶ組織、成長する組織
- (6) 地域との関係づくり
- (7) マネジメントのツールとしての学校評価

【Part 2】カリキュラム・マネジメントについての基本的な考え方

I. カリキュラム・マネジメントについての基本的な考え方

○カリキュラム・マネジメントとは、学校教育目標の実現に向け、子どもや地域の実態をふまえ、カリキュラムを編成・実施・評価し、改善をはかる一連のサイクルを計画的・組織的に推進していく考え方であり手立てである。

○カリキュラム・マネジメントは、学校をめぐる現状の把握と原因の分析を通した目標の設定にはじまり、その実現のための手立ての選択がつづき、カリキュラム・マネジメントの基盤となるグランドデザインの作成に至る。

次に、授業をはじめとする教育活動及びそれを支える組織運営が進められる。そして、掲げた目標や作成した計画の達成の程度が診断・評価され、その結果が学校改善に反映され、目標や計画にフィードバックされる。

このように、カリキュラム・マネジメントは、一連のサイクルとしてカリキュラムの編成・実施・評価をとらえ、結果を改善に結びつけていく発想であり手法である。

○カリキュラム・マネジメントは、学校をチームとして育てることを重視し、その協働の核をカリキュラムに求め、全体と部分、授業とカリキュラム、カリキュラムとマネジメントを、つなげること、つながることを意識する。

○カリキュラム・マネジメントは、“全体”をとらえることを求める。その全体とは、学校教育目標であり、グランドデザインであり、あるいは、全体計画、指導計画、単元であり、さらには、小1から中3までの9年間を通したカリキュラムである。

○学級を担当するにしても、教科の授業を担当するにしても、“全体”を把握しておくことが大切である。自分の学年・学級に、あるいは、教科にとどまる教師に対して、その視野の拡大をめざすのがカリキュラム・マネジメントである。

○カリキュラム・マネジメントに関する知識や技法の学校への導入・定着がもたらす効果をあげるならば、次の通りである。

- ・教師の視野を学級経営や教科からカリキュラムへと広げる。
- ・授業や学年・学級経営をカリキュラムが掲げる目標の達成へと結びつける。
- ・校内における協働の核をカリキュラムに求め、協働文化の形成をはかる。
- ・カリキュラムへの計画・実施・評価を通して、学校経営への参画を促す。
- ・カリキュラムの評価をもとに学校改善への動きが生じる。

Ⅱ. カリキュラム・マネジメントの基礎：カリキュラム・マネジメントをめぐる基本用語

1. 教育課程（カリキュラム）について（1）

1. 教育課程（カリキュラム）について

一定の目的・目標を達成するために、教育活動の基本を定め、教育内容として選択したものを組織し配列した学校の総合的な教育計画。

『小学校学習指導要領解説総則編 平成20年8月』は、学校において編成する教育課程について、「学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。」（p. 8）と述べている。

2. 教育課程の構成要素

教育課程は、次のように、①教育目的・目標、②教育内容、③授業時数、④教材・教具・施設・設備、の4つの基本的要素によって構成される。

○教育の目的、目標（教育目標、ビジョン、本年度の重点目標、めざす学校像、育てたい子ども像・学力、等）

○組織配列した教育内容（各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動、など）

○配当した授業時数（日課表、週時程、月間行事計画、年間行事計画、等）

○教材・教具・施設・設備

3. カリキュラム・マネジメントの3つ側面

○カリキュラムのPDCAサイクル

○カリキュラムを核にした協働

○教育課程全体を通して

2. 教育課程（カリキュラム）について（2）

1. カリキュラム、教育課程をめぐる

(1) スコープとシーケンス

(2) カリキュラムと教育課程

①学校の教育目標から教育課程を編成する

②全体計画、学校教育計画

③各教科等の指導計画の作成

④教育課程全体を通して

2. カリキュラムとマネジメント

(1) 教育内容系列と条件整備系列

(2) カリキュラムをヒト・モノ・カネ・情報からとらえる

3. PDCAサイクルとして

(1) カリキュラムの運用と評価－目標と評価の一体化－

(2) 授業評価－カリキュラム評価－学校評価と学校改善

3. 基本用語の構造的なおさえ

学習指導要領、教育課程、教科書、指導計画、授業、学校教育目標

4. 学習指導要領について

<キーコンピテンシーを基盤にしたカリキュラムー平成20年版学習指導要領の特質>

1. 学習指導要領の改訂について

- (1) 「生きる力」という理念の共有
- (2) “「生きる力」は変わりません、学習指導要領は変わります” ということ
- (3) “総合的な学習の時間を受け皿に” から “教育課程全体を通して” へ
- (4) バランスの取れた教育課程の大切さ

2. 学習指導要領の実現のための課題

- (1) 趣旨の周知・徹底が十分でなかった
- (2) 子どもの自主性を尊重する余り、教師が指導を躊躇する
- (3) 各教科と総合的な学習の時間との役割分担と連携が十分でなかった
- (4) 授業時間が十分でなかった
- (5) 家庭や地域の教育力の低下への対応が十分でなかった

3. 教育内容に関する改善事項

- ・ 言語活動の充実
- ・ 理数教育の充実
- ・ 伝統や文化に関する教育の充実
- ・ 道徳教育の充実
- ・ 体験活動の充実
- ・ 小学校段階における外国語活動
- ・ 社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項（情報教育）（環境教育）（ものづくり）（キャリア教育）（食育）（安全教育）（心身の成長発達についての正しい理解）

【Part 3】カリキュラム・マネジメントの3つの側面

I. カリキュラム・マネジメントの実践（その1）ーPDCAサイクルの確立ー

1. 中央教育審議会答申が示すカリキュラム・マネジメント

（教育課程におけるPDCAサイクルの確立）

○ これまで述べてきた教育課程や指導についての評価とそれに基づく改善に向けた取組は、学校評価と十分な関連を図りながら行われることが重要である。学校評価等を通じて、学校や設置者がそれぞれの学校の教育の成果や課題を把握し、それを改善へとつなげることが求められる。

○ このように、学校教育の質を向上させる観点から、教育課程行政において、

- ①学習指導要領改訂を踏まえた重点指導事例の提示
- ②教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備
- ③教育課程編成・実施に関する現場主義の重視
- ④教育成果の適切な評価
- ⑤評価を踏まえた教育活動の改善

といった、Plan (①)ーDo (②・③)ーCheck (④)ーAction (⑤) のPDCAサイクルの確立が重要である。各学校においては、このような諸条件を適切に活用して、教育課程や指導方法等を不断に見直すことにより効果的な教育活動を充実させるといったカリキュラム・マネジメントを確立することが求められる。

2. PDCAサイクル

(1) 学校教育目標の設定とグランドデザインの構築

- ①学校の使命・めざす方向
- ②学校の教育目標
- ③ビジョンのある学校像
- ④本校のとらえる子ども像、学力、基礎・基本

(2) めざす目標の実現に向けた教育活動の全体構想を描く

(3) 実施の体制を整える

- ①授業日数と授業時間の確保
- ②指導方法と指導体制の工夫

(4) 教育活動の全体構想を共有する

(5) 授業を展開する

(6) 教育課程を評価するー改善、計画へのフィードバックー

<カリキュラムのPDCA>

I. 学校教育目標の設定と教育課程の編成 (P)

1. 学校教育目標の設定

2. カリキュラムを編成する

(1) グランドデザイングランドデザインを描く

学校の使命・めざす方向/学校の教育目標/ビジョン/学校像/本校の子ども像、学力、基礎・基本

(2) 経営戦略を構築する: 大局的に、長期的に、総合的に/将来の社会を展望して

(3) カリキュラムの構造を明確にする

教育理念・目標、教育活動、組織運営/学校の教育活動の全体構想を描く/目標・内容系列と条件整備系列

(4) 実施の体制を整える: 授業日数と授業時間の確保/指導方法と指導体制の工夫

II. 授業を展開する (D)

1. 学習指導の改善をめぐる諸課題

導入段階の時間の取り方/オリエンテーションの工夫/体験的活動/繰り返し指導/各種メディアの活用
/指導と評価の一体化/学習形態の工夫/学習環境の整備/個に応じる指導と一斉指導/教えないことへの
の勇氣、教えることへの徹底

2. TTと少人数指導による学習システムの理解を深め、受容する風土の形成

- (1) 教職員定数の改善
- (2) 指導体制の工夫を促すーチームによる教育をはかるー
- (3) 習熟度による学習についての理解を学習者にも広げる
- (4) 各コース・グループに用いる指導法及び学習材の開発

III. カリキュラムの評価、学校評価ー改善、計画へのフィードバックー (C・A)

1. 教育課程はねらい通り成果が得られているか。

2. 学力調査等の結果、運動や体力に関する調査の結果、などをどのように活用するか。

3. 学校の教育目標を具体化する道筋を読みとることができるか。

(教育課程は、学校の教育目標を具体化するために編成された総合的・全体的な計画であり、各教科、道徳、

特別活動、学年・学級経営などの諸計画を有機的に関連づけた学校の総合的な計画である。）

①教育課程の概念や構成要素、個別計画間の関係やバランス

②教育課程の構造についてのおさえ

4. 法令等の諸基準がふまえられているか。

5. 教科等の年間指導計画、指導案、週案などの個別計画が作成されているか。

（教育課程の実施段階は、個々の教師の授業力を中心とした教育実践力、及び、各教科等の年間指導計画、指導案、週案などの個別計画に支えられる。教育活動を支える年間指導計画や週案などの個別計画の作成の状態に目を向ける必要がある。）

6. 学習および生活に関する指導が適切になされているか。

児童生徒の発達段階に即した指導／教材教具の活用をはじめとする指導方法の改善／観点別学習状況の評価や
評定／教育活動を支える授業研究などの校内研修の継続的な実施

7. 人的・物的な条件面の整備はなされているか。

指導体制や学校施設の整備の状態／学校図書館などの利用計画および整備計画

8. 保護者の要望や意見をどのように把握しているか。

保護者や地域の人々の意見・要望等をとらえるシステム／その運用の方法について

II. カリキュラム・マネジメントの実践（その2）－カリキュラムを核にした協働－

1. カリキュラムを核にした協働－カリキュラム・マネジメントの診断・評価－

①協働して小中一貫教育の全体的な地図が作成され共有されている

②学校全体で授業を通してカリキュラムの改善をはかる

③カリキュラム・マネジメントを通して学校経営への参画がはかられている

④カリキュラム・マネジメントのシステムが機能している

－教育課程委員会・研究推進委員会・広報委員会・学校評価委員－

⑤カリキュラムを核に協働する組織文化が形成されている

2. 一体感を生み出す

(1) 温度差” の存在

(2) それぞれの教職員に当事者意識を

(3) それぞれがかかわるシステムの開発

(4) 理念・基本方針・グランドデザインの共有

3. カリキュラムを核に“つながる”

(1) カリキュラムの“タテ”のつながりへの着目

(2) 学校行事の改善と開発

(3) 授業でつながる

【Part 4】わが校のカリキュラム・マネジメントをどのように進めるか

I. わが校のカリキュラム・マネジメントを診断・評価してみると－10の指標－

- ① 教育目標・方針・全体構想（グランドデザイン）を整えている。
- ② 教育目標・方針・全体構想（グランドデザイン）が教職員に共有されている。
- ③ カリキュラム（教育課程）について教職員の間で共通理解されている。
- ④ 授業を通してカリキュラムの改善をはかっている。
- ⑤ PDCAサイクルが機能している。
- ⑥ カリキュラム・マネジメントを通して学校経営の教職員の参画が図られている。
- ⑦ カリキュラムを核に協働する組織文化が形成されている。
- ⑧ 保護者や地域から教育活動をめぐって評価を得ている。
- ⑨ 教職員は成長している。
- ⑩ 子ども達は成長している。

II. カリキュラム・マネジメントを進める

<わが校のグランドデザインを描く>

<単元・年間指導計画の作成と見直し>

<指導時数・指導体制を整える>

<教材・教具・施設・設備の充実を図る>

<全体像・ビジョンは：小中一貫教育の全体像を描き、ビジョンをつくる>

1. めざす理念、ねらい、育てる子ども像などを構築する
2. 特色ある学校づくりの一環として、子どもや地域の実態をふまえる
3. グランドデザインとして表現する
4. 職種の違いを踏まえた協働について
 - (1) 事務職、養護教諭、栄養職員などと学級担任・教科担任との連携
 - (2) すべての職種の経営参画

<授業改善－観点別学習評価の習熟を通じたカリキュラム・マネジメントの実践化－>

1. レベル1：本時の学習過程の吟味、教育技術の洗練
2. レベル2：単元構成の工夫
3. レベル3：育てたい力、目標に目を向ける－観点別学習評価の理解をはかる－

<中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」>

○中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」平成22年3月24

－今後の方向性としての基本的な考え方－

1. 目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定の着実な実施
2. 新しい学習指導要領等の趣旨を反映した学習評価の具体化
3. 学校や設置者の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価の推進

○文部科学省「児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」平成22年5月11

1. 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直し、個に応じた指導を充実させる
 - (1) 指導の充実や学習の定着を図るために、目標に準拠した評価を実施する
 - (2) 新しい学習指導要領の趣旨等を学習評価に反映させる
 - (3) 学校や設置者の創意工夫を一層生かす
2. 各教科の学習状況評価の観点を、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点で整理した
3. 効果的・効率的な学習評価の推進
 - (1) 学校や設置者においては、学習評価の妥当性、信頼性等を高めるとともに、教師の負担感の軽減を図るため、評価規準や評価方法の一層の共有や教師の力量の向上等を図り、組織的に学習評価に取り組む
 - (2) 情報通信技術の活用により指導要録等に係る事務の改善
 - (3) 国や都道府県などにおいても、学習評価の参考資料や事例の収集・提示を行う
4. 指導要録について
 - (1) 外国語活動について、設置者において、評価の観点を設定することとし、文章の記述による評価を行う
 - (2) 特別活動について、各学校において、評価の観点を定めることができることとし、各活動・学校行事ごとに評価する
5. 高等学校及び特別支援学校高等部の指導要録

○国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成のための参考資料』（小学校）（中学校）平成22年11月

<授業改善と学習評価：探究活動に生きる知識・技能を活用した授業の在り方>

1. 授業改善と学習評価

(1) “A問題”と“B問題”－PISA型読解力の存在－

(2) 授業改善の方向

①言語と体験

②習得・活用・探究ということ

③言語活動の充実ということ

(3) 学習評価の工夫

①「身に付けさせようとしている資質や能力を明確にした上で、学習評価を行う」

②「結果だけではなく、その過程を含めて評価する」

③「教科の特性に応じた表現に係る活動を通じて、評価を行う」

2. 本時中心主義から単元中心主義へ

<学校における組織的な取組－「指導上の評価」と「学校経営上の評価」との連動－>

1. 「指導上の評価」を「学校経営上の評価」の一部に根付かせる

2. 授業や指導計画の改善と一体化したカリキュラム・マネジメント

3. 学習指導に係るPDCAサイクルは、学校評価全体の枠組みの中に位置づける

<授業評価－カリキュラム評価－学校評価>

1. 学習評価をカリキュラム評価、学校評価に結びつける

2. 個々の教職員の自己診断能力を高める

3. 校内研修にあたって

(1) 学校全体をみる－学校評価は学校全体を見つめる研修の機会・場である－

(2) 各分掌と学校全体の関係についての考察

(3) 項目のチェック－私にとってか、学校としてか－

(4) 教育の成果をとらえる－語る、記述する－

(5) 解釈する

(6) 改善につなげる－“こうした方がよいのではないか”を生む－

[学校評価ガイドライン]

教育課程・学習指導

○各教科等の授業の状況

- ・ 説明、板書、発問など、各教員の授業の実施方法
- ・ 視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の活用
- ・ 体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況
-

○教育課程等の状況

- ・ 学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況

- ・ 児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況
- ・ 児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況
- ・ 学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進の取組状況
- ・ 体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況
- ・ 部活動など教育課程外の活動の管理・実施体制の状況
- ・ 必要な教科等の指導体制の整備、授業時数の配当の状況
- ・ 学習指導要領や各教育委員会が定める基準にのっとり、児童生徒の発達段階に即した指導の状況
- ・ 教育課程の編成・実施の管理の状況
 (例：教育課程の実施に必要な、各教科等ごと等の年間の指導計画や週案などが適切に作成されているかどうか)
- ・ 児童生徒の実態を踏まえた、個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の計画状況
- ・ 幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携など学校間の円滑な接続に関する工夫の状況
- ・ (データ等) 学力調査等の結果
- ・ (データ等) 運動・体力調査の結果
- ・ (データ等) 児童生徒の学習についての観点別学習状況の評価・評定の結果

<参考文献>

- ・ 天笠 茂 (監修)・広島県呉市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校 (編著)『公立小中で創る一貫教育－4・3・2のカリキュラムが拓く新しい学び』 ぎょうせい 2005年
- ・ 天笠 茂『学校経営の戦略と手法』 ぎょうせい 2006年
- ・ 天笠 茂「学校づくりとカリキュラム戦略」(連載)①～⑫ 『悠プラス』2009年4月号～2010年3月号
- ・ 天笠 茂 (監修)・呉市教育委員会 (編著)『小中一貫教育のマネジメント－呉市の教育改革－』 ぎょうせい 2010年

【資料1】2011「カリキュラム・マネジメント」

オリエンテーション

マネジメント力をめぐって－教員養成の柱として－

I. 授業を組み立てるシステム

1. 一時間の指導案を作成する
2. 単元と指導案を作成する
3. 学年の教育計画を作成する

II. 教育課程（カリキュラム）について

1. 教育課程（カリキュラム）とは
2. 時間割をつくる
3. 学習指導要領をめぐって－教科等の存在－
4. 授業と教科書

III. カリキュラム・マネジメントの仕組み

1. 学校の教育目標の存在
2. 学校評価とカリキュラム評価と学校評価

IV. 実践例：特色ある学校をつくる－ヒト・モノ・カネ・情報のマネジメント－

1. 指導体制の工夫と学校のスタッフ
2. 地域社会の人々との連携をはかる（*）
3. モノを整えカネを動かす－学習環境の設計と学校にかかる経費－
4. 小中一貫教育をめぐって－4・3・2カリキュラムの開発－
5. 特色ある学校の要件をさぐる（*）

【資料2】この授業で考えたこと、発見したこと－学生のコメント－

○指導案を書く際に目標を定めるが、学校の目標とカリキュラムが関わっていることを、この授業で初めて知った。

○カリキュラムをマネジメントするためには、多角的な視点が必要である。カリキュラムをマネジメントするには決して一人では行えることではなく、各教員の協力が欠かせない。組織として各教員が協力、情報共有をして、知識を凝集していくことが欠かせない。

○学校や教育の組織や仕組みを学習したことで、全体から考える視点に気づくことができました。学校を組織として考え、カリキュラムのマネジメントについて考える視点は、授業を行う一人一人の教員も持つことで、意識が変わります。

○教科書、教育課程、授業、学習指導要領、指導計画、学校教育目標、は互いに強い関係性をもって、よりよい教育のために、どれも欠けてはいけない存在であると考えた。1つ1つが独立しているものではなく、6つのものがリンクしあって、それが大きな枠組みとしてとらえ、その枠組みをもとに学校における教育を考えていくことが大前提であり、その中で各学校における特色というものを出していくべきだなと考えた。

○中学校の教員は自分の教科だけを受け持つのではなく、全体を把握することが必要なのである。教育課程も全体に目を向けられるか。こうしたことがマネジメントという観点から見ても今後の教育に必要なのだ。

1. 授業研究の目的
2. 一般的な授業研究の現状
3. 一般的な授業研究の課題
4. 授業研究の改善
5. 島根大学教育学研究科の教育実習



島根大学教育学部 加藤寿朗

島根大学教育学研究科の教育実習

タイプ		内容	研究テーマ例
A	学級・学校経営研究 (120時間)	学級・学校経営(特別支援, 生徒指導, 教育相談, 特別活動等)に関わる実践的課題の中から研究テーマを設定し, 研究計画の策定, 資料収集(観察, 文献等), 分析, 附属担当教員との協議等を通して課題解決を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・学級崩壊, 不登校, いじめ等の現状と課題 ・園児(児童, 生徒)の思いやり行動を促す支援 ・自尊感情を高める学級経営 ・異年齢児のかかわりを重視した学校行事 ・キャリア教育としての生徒指導 ・くらしと学びができる教室環境の構成 ・地域の人的資源の活用と学級経営
	授業実践研究		
B	B1 研究力養成 (120時間)	授業における実践的課題の中から研究テーマを設定し, 研究計画の策定, 資料収集(文献や実験的授業, 観察等), 分析, 附属担当教員との協議等を通して課題解決を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・言語力の育成をねらった教科指導 ・個の課題に応じたグループ学習のあり方 ・学習意欲の低下と教科指導 ・「HowとWhy」の学習問題では, どちらが生徒の地理認識形成に有効か
	B2 実践力養成 (120時間)	個々の力量や授業・学級経営への問題意識に合った実習プログラムを策定し, 学生による主体的な実習を中心に実践的研究を進める。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習規律と学習集団 ・発問・資料 ・学習形態, 学習活動 ・視聴覚機器
C	教材・カリキュラム開発研究 (120時間)	教材開発, カリキュラム編成に関わる課題の中から研究テーマを設定し, 研究計画の策定, 資料収集(文献や実験的授業, 観察等), 分析, 附属担当教員との協議等を通して教材, カリキュラムを開発する。	<ul style="list-style-type: none"> ・園児の感性を豊かにする絵本の作成 ・山陰の史跡資料の教材化 ・五体を大切に美術科教材の開発 ・エネルギー環境教育のための生物教材の開発 ・地域素材を生かした道徳読み物教材の開発 ・言語力の系統的育成をはかる小・中一貫カリキュラムの開発

1. 授業研究の目的—なぜ授業研究をするのか—

教育活動は教師の意思決定の連続

①意思決定とは

目的・目標を達成するために考えられる手段・方法の中から最も合理的なものを選択・決定する活動

②授業づくりにおける教師の意思決定

授業づくりは教師の意思決定の連続

カリキュラム編成

学習内容の構成

授業の分析・評価

学習材の選択

授業計画の作成

発問・資料の選択

学習形態・学習活動の組織

授業過程の組織

なぜ授業を研究するのか

授業研究のプロセス

1. 目標の達成にとってより望ましいという判断に基づいて、授業づくり(意思決定)を行い、研究授業を行う。
2. 授業の結果から見て教師の意思決定が望ましかったかを検討する。
3. 授業に問題(教師の意思決定が合理的でなかった)がある場合は、その原因を探り、意思決定をやり直して、改善策を考える。

授業研究の目的

すぐれた教育実践を創造するために、教師の意思決定の手がかりや根拠となるデータや理論(考え方)を提供し、その妥当性を授業を通して吟味・検証する

2 一般的な授業研究の現状

①	授業者が指導計画を作成し、事前に配布する。
②	授業者は指導計画に基づいて授業を実施し、結果から授業の反省を行う。
③	事後の検討会において、授業者は授業の意図を発表し、結果から授業の反省を行う。
④	司会者の進行によって、参加者は質問や意見を述べる。
⑤	助言者が授業を分析・評価し、改善点を指摘する。

3. 一般的な授業研究の課題

①	授業研究において研究授業は理論を吟味・検証するための実験であるが、作成された指導計画に授業理論が明示されていないために、授業の事実に基づいて、理論を吟味・検証することができないこと。
②	授業をトータルに抱え込んだ研究であるため、研究課題が不明確であり、何を明らかにすることを目指して行っている授業かわかりにくいこと。
③	教師の関心が指導方法や授業技術に焦点化され、カリキュラムや教材の開発といった内容の創造にまで進まないこと。
④	授業理論が有効であったかどうかを実証する、授業評価の方法が確立していないこと。
⑤	①から④の結果、授業研究が教師(授業者や観察者)の力量形成に結びつきにくいこと。

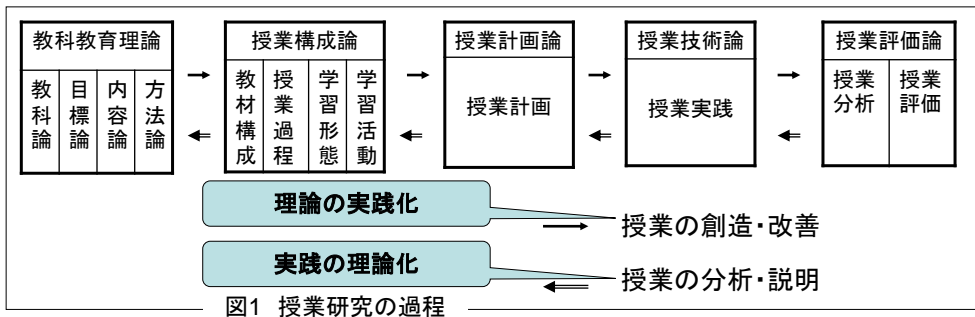
2つの授業研究

理論的な授業研究

授業の現状や問題点を分析・説明することができる、それ故、優れた授業を構成していくことを可能にする授業理論を探究する研究

実践的な授業研究

授業理論にもとづいて優れた授業を創造・改善する研究



4. 授業研究の改善

授業研究を改善する視点

授業研究の課題の観点から授業研究の方法(論)を転換する

①	目標指向的な授業研究
②	問題指向的な授業研究
③	開発研究

4-1 目標指向的な授業研究

目標指向的な授業研究の目的と方法

教育目標を達成するために考えられる(すべての)方法のどれを選択すれば望ましい結果が出るのかについての研究

①	問題把握
②	達成すべき目的・目標の明確化
③	実践可能な授業構成理論(授業づくりの考え方)のリストアップとそれぞれの評価
④	望ましいと考えられるいくつかの授業構成理論の選択とそれに基づく授業計画の立案
⑤	実験的授業の実施とその結果の分析, 授業構成理論の修正・検証
⑥	実験的授業の実施とその結果の分析, 授業構成理論の修正・検証
⑦	望ましいと考えられる授業構成理論と授業計画の選択・決定

4-2 問題指向的な授業研究

問題指向的な授業研究の目的と方法

児童・生徒の実態からみて問題であると考えられる内容について, その原因を究明し, 対策を考えていく研究

①	問題把握
②	問題点の原因究明
③	問題の原因を取り除く方向でのカリキュラム編成や授業構成の理論的な仮説の設定
④	(理論) 仮説の論理的な結果の推論
⑤	(理論) 仮説に基づく授業計画の作成
⑥	研究授業の実施とその結果の批判的吟味に基づく授業構成理論の検証・修正

4-3 開発研究

開発研究の目的と方法

教材やカリキュラムを開発していく研究

①	研究課題の設定
②	研究課題を解決するための先行的な授業理論・授業計画・授業記録の分析による授業構成の(理論)仮説の発見
③	(理論)仮説に基づく教材研究と授業計画の作成
④	授業計画に基づく研究授業の試行
⑤	研究授業の結果の批判的吟味に基づく授業計画・(理論)仮説の修正
⑥	現時点で到達している授業計画の開発

5. 島根大学教育学研究科の教育実習

経験としての実習から研究としての実習へ

学部の教育実習 → 大学院の教育実習

継続的・発展的な教育実習を経験することを通して、「授業実践力(授業観察, 授業構想, 授業展開, 授業評価)」を中心とする「学校教育実践力」を養う。

学部段階の教育実習で習得した「学校教育実践力」を基盤としながら、「授業研究力」を中心とする「学校教育研究力」を養う。

経験としての実習 → 研究としての実習

5-1 教育実習の内容 (配布資料参照)

4つの実習タイプ

タイプA : 学級・学校経営研究

タイプB1 : 授業実践研究 (研究力養成)

タイプB2 : 授業実践研究 (実践力養成養成)

タイプC : 教材・カリキュラム開発研究

すぐれた教育実践を
創造するために、学
校教育研究の理論・
方法論を習得する

5-2 研究方法と実習タイプの関係

目標指向的研究

問題指向的研究

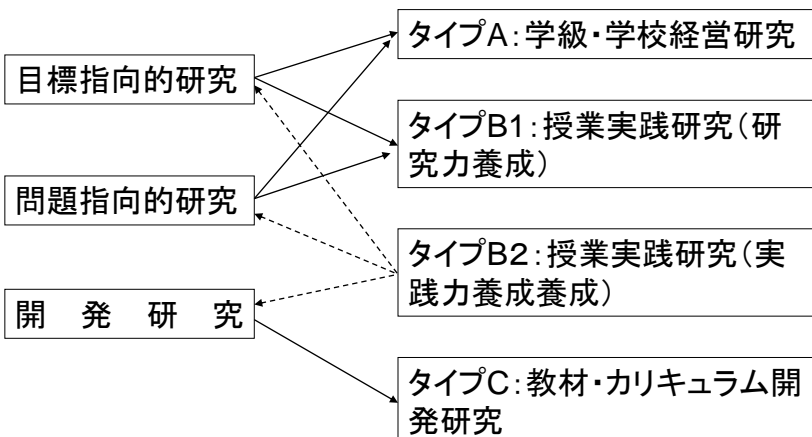
開発研究


タイプA : 学級・学校経営研究

タイプB1 : 授業実践研究 (研究力養成)


タイプB2 : 授業実践研究 (実践力養成養成)

タイプC : 教材・カリキュラム開発研究





〈参考文献〉

- ・平成7・8年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究報告書『教科教育研究の理論的枠組みと体系化に関する総合的研究』
 - ・全国社会科教育学会『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書, 2001
 - ・森分孝治編著『社会科教育学研究－方法論的アプローチ入門－』明治図書, 1999
 - ・溝上泰編著『社会科教育実践学の構築』明治図書, 2004
- 

中堅の現職教員を対象にした「スクール・マネジメントの実践的な課題」を中心とする研修プログラムの開発報告書

平成 24 年 3 月 26 日 印刷

平成 24 年 3 月 26 日 発行

発 行 者

島根大学教育学部
附属教師教育研究センター

〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

HP <http://crte.shimane-u.ac.jp/>

E-mail crte-shimane@edu.shimane-u.ac.jp